和讃を聞く　其の三一一

親鸞さまの

【本文】

罪福ふかく信じつつ
善本修習するひとは
疑心の善人なるゆゑに
方便化土にとまるなり

【意訳】

信罪心(罪深い故に往生できない)、信福心(善人だから往生できる)にとらわれて、阿弥陀様のお救いの道理でなく、自分の考えた道理を拠り所にした行いを積み重ねる人は、阿弥陀様ではなく、自分を中心とする人であるから、その選択どおりの所(阿弥陀様のお浄土ではない所)へと行き着くのです。

【私の味わい】

「月影の いたらぬ里は なけれども 眺むる人の 心にぞすむ」、これは親鸞聖人のお師匠である法然上人の歌だと伝わっています。闇夜に照り映える月は、全ての人を穏やかに包んでいる。一方、ともすれば人は夜空を見上げることなく、その妙なる光に照らされている事にも気付かず、時には当たり前と流してしまうこともある。しかし、ひと度その存在や美しさにに気がつく縁あるならば、月は月として「眺むる人」にこそ伝わり、その人の「心」にも届くのだ、という歌意です。

阿弥陀様は、「超日月光仏」とも表現されますが、日(太陽)と月を凌駕するお光で以て昼夜を問わず全ての人を照らされています。しかし、照らすお方とそのお光に浴していることを知らない、気が付かないならばその人は「眺むる人」とはならず、自ずと「心にぞすむ」ともなりません。加えて、人は心の「蓋」をするものだと聖人はご指摘になっています。それは、自分を拠り所にして、自分の選択と行いを最上の頼りにするという人間の習い性を指しています。生きることにおいてその性質自体は必要なことですが、これを阿弥陀様にまで適用しようとするのが人である、とご指摘なのです。

月に導かれ、月をたよりに、月を目指していく生き方。

月を見ず、懐中電灯を頼りに、自分の行く末を自分で決めていく生き方。

当然、その行く先は違ってくる、ということです。今、この私が仏様に照らされている、そう気がつくご縁を賜った私は、ただ法話を聞きお念仏するばかりです。　(悠水)